

アジア酪農交流会通信

Asia Dairying Exchange Association News

第47・48・49号

2026.
7.31

厳しい時代のなか酪農業の発展を祈念して

アジア酪農交流会 元会長 押 谷 一

牛を飼い、乳を搾り、チーズ、バターの乳製品を製造する酪農業は、人びとの健康と豊かな食を支えています。牛という生き物をはじめ牧草の生育など自然の営みに人間が関与することによって古代から続いてきました。

ところが昨今、日本の酪農家は非常に厳しい環境のなかにおかれています。2020年に策定された「酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針」によって生乳の生産目標が示されたことから、規模拡大を進めてきた酪農家はコロナ禍などによる生乳の需要の落ち込みに加え、飼料・資材の高騰などによって経営が悪化しています。酪農家は自身の経営努力だけでは対応できない人手不足、人件費の高騰などにも直面しています。畑作との複合経営の酪農家が畑作専業に転換している例もみられますが、酪農専業の多い北海道では離農が相次いでいます。地域の経済を支えてきた酪農家が離農すると地域経済は破綻するおそれがあり、耕作放棄地が増えれば北海道の主要産業の一つである観光の目玉である牧草地の景観が失われることにもなります。ウクライナなど国際情勢の不安定化や世界的に気温が「沸騰」している影響などにより食料価格が高騰しているなか、政府をはじめ関係機関においては国内の酪農業の持続的な経営を進めるための抜本的な政策を求めます。

黒澤酉蔵先生は、北海道酪農の大いなる先達である宇都宮仙太郎氏の牛飼いの三徳の教えをよく引用

して酪農家を激励されました。すなわち役人に頭を下げなくてよい、嘘を言わなくてもよい、そして人間の健康に貢献する仕事であるとされたのです。昨今、酪農業を取り巻く周辺環境は厳しい状況にありますが、アジア酪農交流会は、日本国内をはじめアジアの関係者との交流を通じて酪農業の一層の発展を目指しています。黒澤先生のことばを改めてかみしめて苦難を乗り越えて歩んで参りましょう。

ところでアジア酪農交流会の創立者・原田 勇先生は、人間とは、権力や組織、金（カネ）や物（モノ）とか人の顔を恐れるのではなく、天（神）に向かって自ら生きるべきである、と語っておられました。酪農学園創設者の黒澤酉蔵先生の酪農の基本的な理念である「三愛主義」そして「健土健民」の実践です。

さらに原田先生は、酪農学園を退職後、土壌環境に関するヒュー・ハモンド・ベネットの“Soil Conservation”の翻訳に取り組みられ、ご帰天後、2018年に須藤純一氏のご尽力により“土壌の環境保全”のタイトルで、酪農学園大学土壌植物栄養学研究室同窓会より限定出版されました。酪農学園大学の附属図書館にも収蔵されています。酪農関係のみなさまには是非ともご一読いただきたいと存じます。

末筆となりましたが、酪農の抱える課題を突破するため関係各位のさらなるご支援とご協力をお願いするとともに酪農業のみなさまの益々のご発展を祈念しております。

CONTENTS

厳しい時代のなか酪農業の発展を祈念して	押谷 一	1
原田勇先生召天10周年記念集会		
アジアでの酪農技術指導と教育研究協力50余年	中尾 敏彦	2
アジア酪農交流会の原点	細田 治憲	7
宇都宮 潤さんを偲ぶ	安宅 一夫	8
趙民大さんの想い出	發地喜久治	9

事務局報告	10
2022・2023・2024・2025年度決算報告	10
寄付者ご芳名	11
2022・2023・2024・2025年度事業報告	11
役員名	12
編集後記	12
規約	12

原田勇先生召天10周年記念集会 アジアでの酪農技術指導と 教育研究協力50余年

元酪農学園大学獣医学部教授
中 尾 敏 彦

大学卒業後、1970年から1972年まで、JICAの青年海外協力隊に参加して、インド・パンジャブ州の州政府酪農試験場で、獣医師として技術指導に当たったのが、アジア酪農との最初の出会いであった。それから今日まで、50余年にわたって、アジアを始め、南米、アフリカなど、多くの国々で、酪農に関する技術指導や教育研究協力に携わってきた。この間、アジア酪農交流会には、原田 勇先生を始め、多くの会員の方々のご指導とご支援を受けてきた。今回、原田 勇先生召天10周年記念集会において講演の機会を与えられたので、これまでの歩みと活動の一端を紹介し、これからの酪農国際交流の可能性などにも言及してみたい。

1970年から2年間活動したインドは、世界最大の酪農国であり、牛と水牛は庶民の大切な財産としてだいに飼われていた。配属先のパンジャブ州酪農試験場で与えられた指導テーマは、牛の乳量を増やすための技術の指導だった。しかし、牛飼いや数千年の歴史を有し、この厳しい気候風土の中で築かれてきたインド酪農に、日本や欧米の機械化酪農の技術は役立たないことがすぐに分かった。そこで、試験場の乳牛の健康・繁殖管理を行いながら、近隣の農家の乳牛や水牛の往診にも出かけて、それまで見逃されていた問題や不足していた点を見出して、インドの獣医師とともにそれらの解決に取り組むことで、2年間の任務を終えることができた。当時のインドは、人口の急激な増加に伴って、牛乳の不足が深刻化してきており、その対策として、泌乳能力の高い欧米の乳牛品種が導入され始めていた。しかし、

これらの輸入牛は放牧用の原野に多数生息するダニによって媒介されるピロプラズマ症に対する耐性が低く、多くの牛がピロプラズマ症で死亡していた。筆者は、これが小型ピロプラズマ症であることを明らかにして、その治療薬を日本から取り寄せ、牛に投与することで、高い治癒率を上げ、州の畜産局からも高い評価を得ることができた。

このように、牛が神として敬われるインドで、人々の生活になくてはならない牛の役割を学びながら、現場が直面している技術的な課題や技術協力の必要性などを認識できたことは、貴重な体験であった。

帰国後、帯広畜産大学大学院で、乳牛の繁殖学を専攻し、1975年に酪農学園大学獣医学科（外科・繁殖学）助手に採用され、以来、1999年9月までの24年間半、繁殖学の教育、研究、普及並びに国際協力に携わった。

原田 勇先生から、アジア酪農交流会へのお誘いを受けたのは、1980年前後と記憶している。当時の獣医学科の建物の前の道路を歩きながら、「アジア酪農交流会の活動を一緒にやらないか。この会は、形式ばったものにするつもりはないんだ。」と言われ、ごく自然に、「それではよろしく申し上げます。」とお答えしたように思う。鋭い感じの原田先生と、柔らかな村山先生を囲んで、いつも居心地よく活動に参加させていただいた。1988年から1989年までドイツに出張していた時に、原田先生から、素晴らしい励ましのお手紙をいただいたことも強く記憶に残っている。

酪農学園大学在職中は、上司の河田啓一郎先生の下で、「来る者は拒まず。」をモットーに、多くの外国人研修員や留学生を受け入れた。アジア酪農交流協会の関係では、韓国の獣医師と中国内モンゴルの大学教員を1年間ずつ、JICAの関係では、チリの南チリ大学家畜繁殖学教授を3名、タイ畜産局職員を1名、数か月間ずつ、研修員として受け入れた。また、日本獣医師会のアジア獣医師研修事業で、インド、パキスタン、モンゴル、韓国の獣医師を1名

ずつ、それぞれ、1 年間受け入れた。中国からの研修員だった張 文昌氏は、1 年間の研修の後、私費留学生として、大学院に進学し、乳牛の繁殖の研究を続けた。

大学院博士課程に受け入れたのは、中国の張 文昌氏、ザンビアの大学教員（国費留学生）、フィリピンの大学教員（学術振興会論博研究員）およびエジプトの大学教員（エジプト政府高等教育省奨学生 2 名）などで、博士号取得のための研究指導を行った。他に、日本学術振興会のポストドク研究員としてナイジェリアの大学教員を 2 年間受け入れた。彼らは、私達が国際的な学術専門誌に発表した論文を目にして、自分もこのような研究をしたいという希望をもって、酪農学園大学を目指して来たと言う。それと、アジアを始め多くの開発途上国からの留学生で繁殖学を専攻するものの中には、牛の繁殖管理や繁殖障害の研究を希望するものが多く、その一方で、国内でその分野の指導者が少なかったことから、酪農学園大学で受け入れるケースが多かったものと考えている。

研修員や留学生たちは、酪農学園の校風にもなじんで、所属の研究室だけでなく、他の研究室や他学部の先生方の指導やサポートも受けながら、大学での研修・研生活を送ることができた。また、実技の研修や乳牛を使った研究などでは、大学付属農場を始め、植苗農場などでも多くの教員や職員の方々のご理解とご協力をいただいた。大学として外国人学生等を受け入れるための手続きやサポートの点では、当時のエクステンションセンターの存在も大きかった。留学生たちは皆熱心に研究に取り組み、研究の成果を、酪農学園発の論文として国際的な学術誌にどんどんと発表して、大学の評価を高めるとともに、関係者の期待にも応えてくれた。

「卒業生は、大学の最大の財産」と言われるが、喜ばしいのは、本学で学んだ彼らの多くが、帰国後、母国の大学で、副学長や学部長として活躍しており、酪農学園大学とのつながりを持ち続けようとしてい

ることである。例えば、先に紹介した、中国人私費留学生として本学で博士号を取得して帰国した張文昌氏は、その後、福建農林大学動物科学学部の学部長になり、2011年に筆者を同大学に招聘した。

研修員や留学生の関係で、技術指導や研究協力などで、外国に出張する機会にも多く恵まれた。韓国には、国際学会に招聘されて 2 回、フィリピンには、学術振興会奨学生の現地指導で 3 回と国際学会で 2 回、エジプトには、エジプト政府奨学生の学位審査等で 2 回、その後国際学会でも 1 回出張した。また、JICA の関係では、チリに、JICA の中南米対象の家畜繁殖第 3 国研修指導の短期専門家として 2 回、畜産技術協会の畜産事情調査団員として 1 回、パラグアイには、JICA 青年海外協力隊技術専門委員（獣医師）として現地指導に 1 回、出張した。さらに、ウルグアイ牛病学会年次学会での特別講演と学会後の牛繁殖特別コースの講義と実習にも、短期専門家として派遣された。

このように、在職中頻繁に海外に出張する機会に恵まれたのは、上司の河田先生始め、研究室の同僚教員の方々のご理解とご協力、そして、学部および大学の役職者の方々のご理解によるものと、感謝している。

1999 年 10 月、24 年半勤務した酪農学園大学から国際協力専門の大学院大学の一つ、広島大学大学院国際協力研究科に移り、2003 年 9 月までの 4 年間、畜産開発学を担当した。広島大学のこの研究科は、人文科学、社会科学、自然科学系の様々な専門分野で、留学生の教育研究指導や海外での共同研究、技術指導を行うことを主な目的としており、畜産開発学は、工学とともに自然科学系に含まれていた。ここでの仕事は、酪農学園大学在職中にすでに計画されていた、インドのパンジャブ農科大学への出張（インドの大学の家畜繁殖学若手教員対象の卒後教育プログラムでの講義）と、JICA からの委嘱によるネパール国獣医学教育強化プロジェクト予備調査と牛

繁殖学教育研究指導のためのネパールへの出張から始まった(写真1)。その後、JICAベトナム人工授精技術向上プロジェクトに、短期専門家として、2年続けて参加した。

大学院国際協力研究科には、文科省によって設置された修士課程と博士課程の特別コースがあり、毎年一定枠の国費留学生を入学させることができた。ネパールからは、この制度によって、5名の留学生を畜産開発研究室に迎え、そのうち4名は、修士課程から博士課程に進み、学位を取得した。この他、各国の日本大使館の推薦により、スーダンとフィリッピンからも1名ずつ、さらに、エジプト高等教育省派遣奨学生1名、中国からの私費留学生1名も受け入れて、指導を行った(写真2)。

JICAによる短期研修生としては、パラグアイの畜産局職員、ベトナム畜産研究所研究部長と研究員の受け入れを行った。

幸い、広島大学の東広島キャンパスには、広大な付属農場があり、かなりの頭数の乳牛がフリーストールで飼育されていた。広島大学赴任後間もなく、農場の牛群の繁殖管理を任されることになったので、農場側の理解と協力によって、大学院学生たちの乳牛の繁殖に関する研究もスムーズに行われた。また、東広島市にあった広島県農業共済組合の家畜診療所との連携で、共同研究も行われた。外国から選ばれて派遣されてくる留学生はもともと優秀な者が多く、それぞれ、十分な研究成果をあげ、多くの論文を国際的学術誌に発表した。

研究科では、各分野の持ち回りで、毎年2名の著名な外国人研究者を6か月間客員教授として招聘する制度があり、筆者が在職した4年間で、2名の畜産獣医学教授を招聘することができた。フィリッピン大学ロスバニョス校獣医解剖学教授とインド・パンジャブ農科大学家畜繁殖学教授で、それぞ

写真1. ネパールにおける牛と水牛の繁殖検診キャンプの開始(1999)



写真2. 広島大学大学院国際協力研究科畜産開発研究室のメンバー(2002)

れ、得意分野で研究教育に尽力いただいた。インドの教授が在任中に執筆し、筆者との共著論文として Animal Science Journal に発表された総説「アジアの農村の経済社会的発展における水牛の役割：現状と将来展望」は、これまで世界中の水牛の生産と衛生に関する多くの学術論文に幅広く引用されている。このインド人教授は、その後、インド政府の畜産コミッショナーを務め、さらに、パンジャブ農科大学学長も務めた。

広島大学在職中は、共同研究などで、特に、ネパールに出かけることも多かった。赴任後間もなく、JICA 短期専門家として、トリブヴァン大学農畜産学部に出張して、牛と水牛の繁殖障害の診断と治療の指導を行ったのを皮切りに、畜産開発研究室の准教授が代表となって獲得した文科省海外科学研究助成「熱帯酪農の生産阻害要因の調査研究」によって、毎年、現地に出張して、共同研究と技術指導を行った。この大学では、その前から、麻布大学獣医学部の小林好作教授（当時）が研究指導を行っており、筆者らの現地活動の際にもご支援とご協力をいただいた。

日本に留学して博士号を取得してネパールに帰国したものの中には、米国の大学で活躍しているものも少なくないが、母校に戻り、地道に実績を積んで、現在大学の要職を務めている者もいて、日本との学術交流の窓口になっている。また、現在の国立農林大学の副学長（学長は名誉職で首相が務めるので、実質的な学長）を昨年まで務めた獣医内科学教授は、麻布大学の小林先生のお世話で、酪農学園大学の永幡教授（当時）の下で、博士論文を仕上げ、博士号を取得した。永幡先生のご尽力にもあらためて感謝の意を表したい。

このように、広島大学では、4 年間、酪農の国際協力と交流の最前線に立って、アジアの国々で活動することができた。その後、古巣の獣医学界の関係者からの強い勧めに従って、山口大学農学部獣医学科に移動した。

山口大学には、定年退職までの 6 年間在籍したが、学内では、教育研究に加えて、動物病院長や獣医学科長などの役職もあり、学外でも多くの公職をかかえて、結構多忙であった。ただ、幸いなことに、ここでも、赴任後間もなく、乳牛の繁殖の研究を志す優秀な留学生を 5 名受け入れることができた。大使館推薦による留学生が、インドネシアの大学教員、スリランカの大学教員そしてベトナムの大学教員と畜産局職員の 4 名で、大学推薦による留学生が、ネパールの新卒 1 名であった。ただ、山口大学付属農場には、肉牛だけで、乳牛は飼育されていなかった。そこで、青年海外協力隊 OB 会を通しての知り合いで、山口県農業共済組合にも長年勤務されていた方に、乳牛の繁殖学の研究に協力してもらえそうな酪農家を紹介いただいた。また、併せて、農業共済組合の診療所に勤務していた酪農学園大学の卒業生にも酪農家の紹介をお願いした。山口県畜産試験場と山口県乳牛育成牧場においても、長期間にわたって、共同研究を実施することができた。さらに、広島大学時代から協力いただいていた鳥取県の牧場や、酪農学園大学卒業の獣医師に紹介いただいた北海道内の複数の牧場などでも、長期間にわたって、週 2～3 回の乳汁のサンプリング（ホルモン測定用）と牛群情報の提供をお願いすることができた。5 年間あるいは 6 年間にわたって、研究室の学生や留学生を伴って、毎月、乳牛の定期検診を実施させていただき、乳汁サンプルの採取にご協力いただいた酪農家の方々や試験場関係者のご理解とサポートに感謝したい。留学生達も熱心に乳牛の繁殖の研究に取り組み、全員優秀な成績で博士課程を修了することができたこと、そして、研究成果を論文として、数多く、国際学術誌に発表し、世界レベルで繁殖学の進歩に貢献できたことは、今でも誇りに思っている。

この間、国際協力や交流の機会はあまり多くはなかったが、平和中島財団の研究助成を得て、ネパールの農林大学での共同研究を実施するとともに、農林大学の繁殖学担当の中堅教員を山口大学に招聘

し、研究指導を行った。数年後、この教員は、山口大学連合大学院で論文提出による博士号取得試験のため再度来日し、学位を取得した。また、JICA 短期専門家として、パラグアイとアルゼンチンを訪問し、獣医学術集会および大学主催セミナーなどで講演を行った。同じころに、インドネシアの留学生の所属先のハサヌディン大学からも学術交流のために招聘された。

2010年に山口大学を定年退職した後も、関連の学会や団体の役員などを務めるとともに、海外での技術指導や研究協力に取り組んできた。

2010年には、ドイツのフンボルト財団の招聘で、ハノーバー獣医科大学での乳牛の代謝障害と繁殖に関する共同研究に参加した。

JICA の関係では、酪農学園大学卒業生がチーフアドバイザーを務めていた、ウガンダ国家畜疾病診断技術向上プロジェクトの短期専門家として、3 か月間ずつ2回、マケレレ大学に出張した。ウガンダでは、その後、酪農学園大学獣医学部の蒔田教授による草の根プロジェクトが始まり、その現地指導でも、2回出張した。2017年から5年間は、キルギスの生乳生産向上技術プロジェクトの国内支援委員会委員長として、後方支援にあたるとともに、2回、現地を訪問した。

日本の大学院を修了して帰国し、それぞれの大学の教員として活躍している元留学生のお世話で、ベトナムのハノイ農科大学、スリランカのワイアンバ大学とペラデニア大学、中国の福建農林大学、ネパールの国立農林大学などにも招聘され、研究交流を行った。中でも、ベトナムのハノイ農科大学には、数回招聘され、牛の臍内留置型黄体ホルモン製剤の開発に関する指導や乳牛の繁殖管理指導のワークショップを行った。その後、数年前から、ベトナム北部の小規模農家が飼育しているベトナム原産種肉牛の繁殖成績向上プロジェクトにもアドバイザー

として参画しており、近々、現地を訪問する予定になっている。

ネパールでは、長年にわたってネパールの獣医学教育研究の充実発展に尽くされた麻布大学名誉教授小林好作先生（故人）の功績を称えて、2016年に小林好作記念財団が創設され、その記念式典と国際シンポジウムが農林大学で開催された。日本からも多くの大学の関係者が招待された。筆者も招待を受け、式典で小林先生のご功績の紹介を行うとともに、国際シンポジウムで乳牛の繁殖技術の進歩について講演した。この大学では、日本の他、韓国の牛の疾病診断技術向上プロジェクトや米国の複数の獣医系大学との学術交流も行われており、着実に、教育研究の充実が図られている。

おわりに：酪農学園大学は、これまでに、多くの卒業生を、JICA の青年海外協力隊員や技術協力専門家として、開発途上国に送り出している。筆者も、技術指導や研究協力の現場のいたるところで、多くの卒業生に助けられながら、活動を行ってきた。卒業生達が、現地で、相手国の信頼を得て、日本の国際協力の担い手として働く逞しい姿に感動するとともに、本学の教育の確かさを実感させられる貴重な機会でもあった。

これからの日本の酪農は、アジアの中の日本という理念の上に、将来の発展性が見いだせるのではないと思われる。そして、そのアジアにも、世界の中のアジアという位置づけが求められている。近い将来、人口が爆発的に増加するアフリカは、経済発展が著しいアジアと同様に、これから酪農の振興が最も期待される地域といえる。アジア酪農の歩みの先には、アフリカを含めた世界の酪農の進歩があるものと思われる。

インド酪農の出会いから50余年。今後も、アジア酪農交流会とともに歩み続け、世界の酪農の進歩を見守りたいと思う。

原田勇先生召天10周年記念集会 アジア酪農交流会の原点

由仁町 酪農家
細 田 治 憲

まず始めに原田先生とご逝去なされた多くの会員の皆様に心から哀悼の誠を捧げます。そして、会の活動主旨をご理解頂き、側面からご協力、ご支援頂きました事に対し感謝申し上げます。

酪農学園創設者の黒澤西蔵翁は72年前デンマークを視察訪問した時、祖国の為に「人間教育」の大切さを実感し、同じ敗戦国である日本再建の祈りを込めて「三愛主義」を酪農学園建学の精神とすると語って居られる。建学の精神を継承した外郭組織の一つにアジア酪農交流会がある（酪農学園史Ⅲ P.395）アジアに於ける酪農の振興発展と若い農業青年に対する支援を目的としたボランティアの国際交流実践活動組織である。

20周年記念は韓国ツアーを企画し、日韓セミナーを札幌、ソウル、済州島の3か所で開催し盛会だった。

30周年記念事業について議論した時、原田勇名誉会長は「デンマーク」視察を提唱された。アジア酪農交流会が何故デンマークなのか？と問うた時、「30周年を期に交流会活動の基軸（物事に対する考え方や行動）を原点に戻って新しい気持ちで活動に取り組まなければ交流会の発展は無い」と語られた。デンマークについては出納陽一教授（私の母は出納農場の門下生）、中曽根徳二教授、中原准一教授から機会ある毎に何回も拝聴していたが、私はアメリカで実習した事もあるが、アメリカやカナダの方向に関心が強く、乳牛改良、共進会や規模拡大の事等しか考えていなかった。

北欧ツアーを企画することになり、中原准一元会長からデンマーク在住の王立獣医農業大学の高井久光教授をご紹介頂き、コーディネーターをお願いすることになった。

世界初のミドルグロン洋上風力発電所、バイオガスパラント事業、社会福祉事業、有機酪農家、農学校、普及センターなど総じて目を見張る事ばかりで短期間に充実した視察研修フォーラムであった。まさに「百聞は一見に如かず！」（※フォーラム、視察報告関係は30周年記念誌）。

デンマークに於けるフォーラムで原田勇名誉会長は、救国者エンリコ・ダグラスとグルンドビー牧師の話をした。デンマークが敗戦から復興する過程で原点になったのは、キリスト教を基軸とする人間教育であった事。グルンドビー牧師は「三愛主義」神を敬い自分を愛する如く隣人を愛し祖国を愛せよを提唱し、クリステン・コル教育者と共に実践教育した。また、グルンドビー牧師は幾多の困難や苦難を経験して辿り着いた結論は「先ず人間であれ！次いでクリスチャンであれ！」と言っている。先ず人間であれ！これはどういう事なのだろうか？次いでクリスチャンであれ！デンマークはキリスト教の国、ほとんどの人がクリスチャンだから実社会に置き換えて考えればよいのではないか。次いで職業人であれ、組織人、技術者、学者、学生であれ！と考えればよい。その頭に先ず人間であれ！課題を提起して終わった。晩年原田勇酪農学園園長は、酪農学園の教職員の方々に、人間とは権力や組織、金や物とか人の顔を恐れるのではなく、天（神）に向かって自らを生きる！と語って居られる。映画「レ・ミゼラブル」の中で「Who am I？」同様に「先ず人間であれ！」難解な課題を提起して敬愛する師は逝かれた。原田勇名誉会長がご逝去されて11年経過している。時代や世代、環境も急速に推移しているが創設者が提唱された「三愛精神」を継承、実践してほしい。主軸が振れてしまうと存在価値が問われる事になる。「牛の歩みの如く」という言葉があるが、目的意識をもって活動の歩みを止めないでほしい。「継続は力なり！」。

原田勇名誉会長は多くの教訓と課題を提起しながら急逝なされた。残された物の責任と自覚は大きい。在天の「魂」に平安があります様に。

宇都宮 潤さんを偲ぶ**2021年7月9日 宇都宮潤前夜式挨拶**

アジア酪農交流会顧問

安 宅 一 夫

ただいま紹介いただきました安宅でございます。

宇都宮潤様の多くの友人の一人としてご挨拶申し上げます。

潤様には長らく親しくご指導いただいたものでございます。

特に30年前くらいから今日まで時々お宅を訪問して、奥様からコーヒーとお菓子をいただきながら楽しいお話をさせていただきました。いつもは突然訪問するのですが、嫌な顔をせず歓迎され、長居をしてご迷惑をおかけしておりました。5年前には潤様、奥様と一緒に宇都宮家のお墓参りに誘っていただき、4年前にはいちごの季節に招待いただきました。宇都宮牧場では1番狩りの後でみんなでいちごパーティーをするのが恒例のようでした。この間平成8年にリンパ腫で入院し、その時死を覚悟したようで私に葬儀委員長になるよう指名されました。その後病気は奇跡的に回復しましたが、経営は治さんに任せ、悠々自適の生活をしておりました。最近肢が不自由になり、昨年からは奥さんと施設で暮らしておりましたが、2年前に細田さんと私が潤さんに呼ばれ、再び葬儀のことで話があり、牧師さんのこと、葬儀委員長、友人代表をだれにするか淡々と述べ、葬儀委員長は再び私、友人代表は細田さんということになりました。潤さんは最後まで目立つのが好きでなく、喧嘩がないように、ウシ屋さんでなく、私を選んだのだと思います。

さて前置きが長くなりましたが、潤さんの人生は美しく、貴いものでした。潤さんは、日本酪農の父・宇都宮仙太郎の孫として、日本ホルスタインの父の長男として酪農界に身を置き、先代からの宇都宮精神を受け継ぎました。偉大な指導者の後継者として酪農界に身を置いたことは相当な重圧であったことと思います。潤さんは高校卒業後、酪農実習のため渡米します。ほぼ同時期に町村末吉さん、黒澤勉さんと一緒になり、三人は戦後初の酪農実習生とな

り、帰国後三人は酪農界のスーパースターになるのです。戦後、日本酪農復興の象徴として全日本ホルスタイン共進会が5年ごとに開催されるようになりました。最初の2回迄は当時の大御所宇都宮勤さん、町村牧場の敬貴（たかひろ）さんの独壇場でしたが、第3回目から潤さんが連続3回名誉賞を受賞、昭和41年には第5回農業祭で天皇賞に輝き、この記録は破られていません。まさにスーパースターとなり、全国の酪農青年のあこがれの的でした。全国に多くの実習生・門下生がいますが、その一人ここにいます細田治憲さんも第5回全日本共進会で堂々名誉賞を受賞し、天皇賞の候補になりました。しかし残念ながら当時31歳若すぎると評価されたようです。潤さんはスターでしたが、決して驕らず、優しい人でした。私が潤さんから大事な本をお借りして、痛めてしまったとき、最初から痛んでいたよと慰めてくれたことがありました。宇都宮精神は「堅忍不拔」、そして仙太郎翁の銘である「空樽自鳴」を体言されました。頑固なところもありましたが、達識重厚不言実行の人でありました。

潤さんは旅に出かけました。弟さんの信さんも1か月前に先に旅立たれたそうです。つらかったと思います。20年前、潤さんが奥さんとアメリカ旅行した時、友人の葬儀に参加して感動した詩があり、皆さんに伝えてほしいと託されました。これは日本でも知られている千の風という歌の元の詩です。長いですが読みます。

私のお墓の前で泣かないでください。

私はそこにいません、私は眠りません。

私は千の風。

私は雪の上のダイヤモンドの輝き。

私は豊穡の穀物にそそぐ陽の光。

私は穏やかな秋の雨。

あなたが朝の静けさの中目覚めるとき

私は上昇気流となって弧を描いて飛ぶ静かな鳥たちといます。

私は夜に輝く優しい星々。

私のお墓の前でなげかないでください。

私はそこにいません、私は死ななかつたのです。

潤さんがやすらかに旅たつようにお祈りいたします。そしてご家族の方と皆さまの心の平安をお祈りいたします。

趙民大さんの思い出

發 地 喜久治

2019年9月29日、90歳で永眠された趙民大さんは、長くアジア酪農交流会の活動を支えて下さった方でした。

長期間、本会の理事を務められ、2011年からは顧問として貴重なご助言をいただきました。

私との思い出も、いくつかありますので、ここに皆さまにご紹介し、追悼文とさせていただきたいと存じます。

趙さんは、日本と韓国との友好関係が永く続くことを望んでいました。

アジア酪農交流会も、韓国の方々のご協力をいただき、シンポジウムや視察など、数々の国際交流を進めていたことは、皆さまもよくご承知のところかと思います。

駐札幌大韓民国総領事館の主催する各種講演会などのイベントにも、本会関係者が招待され、参加しています。

趙民大さんは、日本と韓国の懸け橋として、総領事館に働きかけ、交流が円滑に進むように心配りをされておられました。

そのことを知ったのは、2018年でした。年が明けたある日、趙民大さんからお電話をいただきました。ご要件は、札幌総領事とアジア酪農交流会代表との面談をセットしたいので協力をいただきたい、ということでした。もちろん、二つ返事で、参加を申し出ました。たまたま、私が当時、本会の会長を務めていましたので、お話をいただいた次第ですが、他に、安宅一夫顧問、野英二理事にお声掛けをされていました。

当日、総領事館にて、趙民大さんと本会の3名が、当時赴任して間もない朴賢圭総領事と面談いたしました。冒頭、趙民大さんから、本会と韓国酪農関係者との交流の歴史、酪農学園大学での韓国留学生の受け入れ状況などについて、総領事へのご説明があり、更に、今後も日韓交流の担い手として、アジア酪農交流会との関係性を重視していただきたい、との要望も述べられました。

総領事との面談は和やかに行われ、今後も交流を進めることを確認し合いました。

帰り際、領事館の前でお別れする際に、趙民大さんは、“高齢になって以前のように活発に行動できなくなったので、総領事館を通じた日韓交流が、今後も行われ続けることを願って、面談をセットした”との思いを私たちに述べられました。

そのことが、あったからだと思いますが、同年11月には、駐日本国大韓民国大使館の農務官から、お電話とメールをいただきました。農務官の他、二等書記官と専門官の3名で、札幌に出張する予定があり、北海道の酪農関係者から“T P P・日欧E P Aの発効に際して日本の農畜産酪農業界の動向と対応策・反応等を聴取”したいので、協力をお願いする、という内容でした。

お電話では、札幌総領事からアジア酪農交流会を紹介されたとのことで、是非、本会関係者からも、お話を伺いたいという要請をいただきました。なお、道庁関係者及び酪農家とは、別途面談と視察の予定を組んでいるとのことでした。

趙民大さんの拓いた交流の途が通じたのだと思い、協力を申し出た次第です。同年12月、東京の韓国大使館から、予定通り3名がお出になり、本会からは中原准一顧問と、職責上私が面談させていただきました。

その後、趙民大さんにお会いしたのは、2019年4月12日に開かれた駐札幌大韓民国総領事館主催の講演会でした。車椅子を利用されていましたが、穏やかな笑顔に変わりはありませんでした。ご息女と思われる方と、ご挨拶をさせていただきました。そして、それが私にとって、趙民大さんとお会いする最後のご縁になりました。

なお、ご息女様からは、後日、丁寧な訃報をいただいております。そこには、本会の皆さまへの手書きのメッセージが記されていたので、遅ればせながら、ここにご紹介いたします。

“父が生前、大変お世話になり、ありがとうございます。アジア酪農交流会で出会えた方々が、父の自慢でございました。皆様のおかげで、実りある晩年であった事を心から感謝しております”

コロナ禍とは言え、趙民大さんを追悼する機会を、速やかに設けることが、出来なかったことを申し訳なく思っています。

合掌

アジア酪農交流会 2022～2025年度決算報告

2022年 1 月 1 日～2022年12月31日

収 入	前 年	繰 越 金	895,880 円
	寄 附	金	170,036 円
	利 息		8 円
合 計			1,065,924 円
支 出	通 信	費	10,265 円
	原 田	賞	54,800 円
	印 刷	費	154,550 円
	雑 費		14,946 円
合 計			234,561 円
収支決裁	収 入		1,065,924 円
	支 出		234,561 円
収 支 差 額			831,363 円

2023年 1 月 1 日～2023年12月31日

収 入	前 年	繰 越 金	831,363 円
	寄 附	金	84,000 円
	交 流	会	27,000 円
	利 息		7 円
合 計			942,370 円
支 出	交 流	会 費	55,712 円
	通 信	費	7,125 円
	原 田	賞	16,800 円
	印 刷	費	21,450 円
	雑 費		3,850 円
	慶 弔		0 円
	助 成	金	50,000 円
	寄 附	金	0 円
合 計			154,937 円
収支決裁	収 入		942,370 円
	支 出		154,937 円
収 支 差 額			787,433 円

2024年 1 月 1 日～2024年12月31日

収 入	前 年	繰 越 金	787,433 円
	寄 附	金	190,000 円
	交 流	会	40,000 円
	利 息		33 円
合 計			1,017,466 円
支 出	交 流	会 費	70,945 円
	通 信	費	35,450 円
	原 田	賞	40,750 円
	印 刷	費	9,900 円
	雑 費		3,850 円
	慶 弔		0 円
	助 成	金	0 円
	寄 附	金	0 円
合 計			160,895 円

収支決裁	収 入		1,017,466 円
	支 出		160,895 円
収 支 差 額			856,571 円

2025年 1 月 1 日～2025年12月31日

収 入	前 年	繰 越 金	856,571 円
	寄 附	金	53,000 円
	交 流	会	0 円
	利 息		517 円
合 計			910,088 円
支 出	交 流	会 費	10,000 円
	通 信	費	4,180 円
	原 田	賞	0 円
	印 刷	費	0 円
	雑 費		3,850 円
	慶 弔		0 円
	助 成	金	50,000 円
	寄 附	金	0 円
合 計			68,030 円

収支決裁	収 入		910,088 円
	支 出		68,030 円
収 支 差 額			842,058 円

寄付者ご芳名

- (2022年 1 月 1 日～2022年12月31日)
- 尹 汝昌 原田 綾子 福田 昭夫 中林 正明 佐々木史朗 細田 治憲
押谷 一 高陽 鐘律
- (2023年 1 月 1 日～2023年12月31日)
- 小貫 満子 中尾 敏彦 十倉 宏 押谷 一 韓国ユンさん 松屋商事
- (2024年 1 月 1 日～2024年12月31日)
- 原田 綾子 北川 直揮 押谷 一 小野武二三 松屋商事
- (2025年 1 月 1 日～2025年12月31日)
- 三谷 耕一 小貫 満子

アジア酪農交流会 2022～2025年度事業報告

アジア酪農交流会の集い 2022年12月14日
総会
原田賞（4名）
篠原 功氏（元酪農学園大学教員）
加藤 勲氏（元酪農学園大学教員・アジア酪農交流会監事）
中尾 敏彦氏（元酪農学園大学教員）
高陽 憲基氏（千歳市 酪農家）
原田勇先生召天10周年記念集会・追悼
原田勇先生召天10周年礼拝
小林 昭博教授
「アジアでの酪農技術指導と教育研究協力50余年」
中尾 敏彦氏
「原田先生とアジア酪農交流会」
細田 治憲氏
「これからのアジア酪農交流会に期待すること」
安宅 一夫氏

アジア酪農交流会の集い 2023年12月15日
総会
原田賞（1名）
土谷 令次氏
講演
基調講演 1
講師：河野 崇治氏
演題：妥協せず基本に忠実な循環型酪農経営の実践
基調講演 2
講師：中原 准一氏
演題：2023台湾ミッションレポート
昼食・懇談会（軽食）

国際酪農フォーラム

国際酪農フォーラム 2024年 3 月22日
テーマ：「丁抹（デンマーク）の農業」出版100周年記念
講師：安宅 一夫氏
演題：国際酪農フォーラム開催の意義
―北海道とデンマーク交流100周年を俯瞰して―
講師：中原 准一氏
演題：デンマークの酪農、環境問題とエネルギー基調講演
講師：牛山 泉氏
演題：自然エネルギー大国デンマークに学ぶ
～風力発電を中心に～
講演
講師：Ejner Poul Rasmussen氏
（Renew Energy社）
演題：デンマークにおけるバイオガス施設のニューモデル
講師：Jun Pyo Choi氏（Renew Energy社）
演題：オランダにおけるバイオチャーについて

アジア酪農交流会の集い 2024年 6 月 4 日
総会
原田賞（2名）
三浦 照夫氏
中林 正明氏
昼食・懇談会（軽食）

アジア酪農交流会 学内セミナー 2025年 5 月30日
テーマ：地球温暖化の仕組みと課題
講師：宮下 純夫氏（新潟大学名誉教授）

アジア酪農交流会役員 (2026年度～)

名誉会員	金 奉柱	尹 汝昌		星野 仙方	發地喜久治	金子 正美
顧問	坂本 与市	細田 治憲	牧野 一穂	高井 久光	上原恒一郎	鈴木 正
	安宅 一夫	中原 准一	山田 実	藤本 達也	佐藤 寛晃	浦川 利幸
	柳 監永	河野 崇治	嘎 尔廸	福田 昭夫	田村 健一	ダナ・パティ
	V.I.グレビッチ			Palle Hoej	梅原 健二	早坂 悟
会長	小糸健太郎			野 英二	押谷 一	井下 英透
副会長	小林 紀彦	福森 理加	鈴木 善仁	棚瀬 基晴	中薮 俊秀	新村 浩隆
理事	艾尼瓦尔艾山	崔 一信	孫 鏞錫	石井 智美		
	胡 尔查	梁 信喆	アイヌル・エズム	監 事 野 英二	上野 光敏	
	盧 金鎮	林 翰群	玉 柱	事務局長 土井 和也		
	朝 格图	孫 啓忠	三浦 照男	事務局次長 安達ゆき子		
	菊地 創	三谷 耕一	小山 久一	会 計 石塚 研太		

* * * 編 集 後 記 * * *

アジア酪農交流会通信第47・48・49号を無事発行することができました。長い間、通信を発行できずにおりましたことをお詫び申し上げます。

通信の発行が滞っていた間に、アジア酪農交流会では役員の改選が行われました。新たに、酪農学園大学教授の小糸 健太郎氏が会長に就任し、副会長には小林 紀彦氏、福森 理加氏、鈴木 善仁氏の3名が就任いたしました。また、事務局次長には安達 ゆき子氏が就任いたしました。新しい役員体制のもと、会員の皆様のご協力をいただきながら、本会の活動をさらに充実させていきたいと考えております。

アジア酪農交流会は2025年に発足50周年を迎えました。これを記念して、今年の総会では50周年祝賀会の開催を予定しております。また、50周年記念誌の作成も進めておりますので、どうぞご期待ください。

これからも会員の皆様との交流を大切にしながら活動を続けてまいります。今後ともご支援、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。(土井)

アジア酪農交流会規約

第1条 この会はアジア酪農交流会と称し、本部事務局を北海道江別市文京台緑町・酪農学園大学におき、必要に応じて支部をおく。

第2条 この会はアジア諸国の農学並びに農村振興に関心をもつ人々の友好親善を促進し、併せて青年農学徒の育成に協力することを目的とする。

第3条 この会は目的達成のために次の事業を行う。

1. アジア諸国の酪農に関する情報交換。
2. 酪農青年の交換研修に対する物心両面での援助。
3. 講習会、講演会、視察会等の開催。
4. その他。

第4条 この会の目的に賛同する個人及び法人は何人でも会員になれる。

なお、会員は金額の多少を問わず、寄附金の義務を負う。

第5条 会員の中から互選により、会長、副会長、理事

及び監事をおく。

役員は、理事会により選出され、任期は2年とする。ただし、再任をさまたげない。

また、理事会の審議により名誉会長、名誉会員、顧問をおくことができる。

第6条 本会の事業は、毎年1月1日から12月31日までとし、経費は、寄附金その他をもって充当する。なお、予算・決算の審議は理事会によって行う。

第7条 本会は、設立者原田勇の業績を顕彰し、原田賞を設ける。表彰者は本会の目的に対する功績者とし、その規定は別途定める。

補 則 この規約の変更は理事会で行う。

1975年10月18日 発足総会において決定。

1976年2月17日 一部改正。

1995年7月31日 一部改正。

2006年6月5日 一部改正。

2013年8月21日 第7条追加。